

保田與重郎『日本浪漫派の時代』の構造可視化 ——日本語文章の絵解き——

谷 口 敏 夫

0 目次

- 1 はじめに
- 2 実験・調査の目的と方法
- 3 文章地図
 - 3. 1 用語の分類
 - (1) 人名の概略
 - (2) 事項名の概略と分類
 - (3) 用語の傾向
 - (4) 用語の地図化
 - 3. 2 人物と事項の認定
 - (1) 人物・事項の名寄せについて
 - (2) 人物・事項の概説
- 4 クラスター分析
 - 4. 1 人物・事項のクラスター分析
 - 4. 2 人物・事項地図に表れた小概念
- 5 まとめ
- 付録A 同定した人名表
- 付録B 括弧付き用語のクラスター分析

1 はじめに

これまで行ってきた日本語文章の可視化を振り返ってみるならば、平成12年(2000)の保田與重郎『日本の文学史』*¹では、図書一冊の内容を既知に近い日本文学史の編年で考えることができた。そこからA～Fにいたる六つの小概念*²を抽出し地図として可視化した。保田の文章に表れる客観的な用語の頻度を自製のKT2システムで分析し、その出現位置を等高線グラフ*³で地図化したことによる。そこで得られた六つの小概念は、保田独自のものであり、保田を理解するに際し、客観的な指標として用いることができるものであった。この場合には、上代から近代にいたる文学史という枠組みがあらかじめ既知の知識として普及しているので、それと比較して保田の『日本の文学史』がどのようなものであったかが、明確になった。

次に平成13年(2001)～16年(2004)にかけて三島由紀夫『豊饒の海』全四巻*⁴について分析を行った。ここでは、新たにクラスター分析*⁵手法を用いて、登場人物や事項の配列を自動的に決定させることで、より明確な地図を得ることができた。『春の雪』と『奔馬』との照応関係や、『暁の寺』での二部構成による人物の空白、また最終巻『天人五衰』の全巻に関係する物語終末の決着などが明らかに見えた。三島由紀夫の小説構造の堅固さが明白となった。

* 1 谷口敏夫「日本語文章の可視化—保田與重郎『日本の文学史』の絵解き—」京都光華女子大学研究紀要、38、pp117-168

<http://www.koka.ac.jp/taniguti96M/0/30/2000/Yasuda2000/Yasuda2000idx.html>

* 2 小概念とは、図書などの知識総体を構成している諸概念の、グループの一つと考えている。本論では、用語集合(例：{日本浪漫派、コギト})や、いくつかの用語集合の強い関連を小概念と呼んでいる。

* 3 マイクロソフト社製「エクセル」

* 4 谷口敏夫『春の雪』、『奔馬』、『暁の寺』、『天人五衰』の小説構造可視化、連載。京都光華女子大学研究紀要、39(2001)～42(2004)

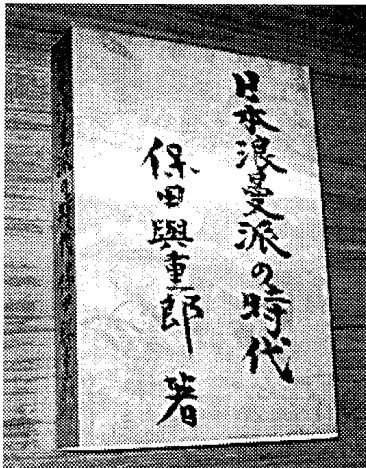
<http://www.koka.ac.jp/taniguti96M/0/30/2001/Misima2001/Misima2001.html>

<http://www.koka.ac.jp/taniguti96M/0/30/2002/Misima2002/Misima2002.html>

<http://www.koka.ac.jp/taniguti96M/0/30/2003/Misima2003/Misima2003.html>

<http://www.koka.ac.jp/taniguti96M/0/30/2004/Misima2004/Misima2004.html>

* 5 システムは「Let'sStat!Pro」<http://homepage3.nifty.com/QZM01222/LetsStat/lsIndex.html>



さて、本論で扱った『日本浪漫派の時代』はこれまでのテキストと比較してどのような特徴があるのか。そのことをあらかじめ記しておく。(写真は初版)

本書は、評論家保田與重郎が昭和四十四年十二月、至文堂から出した図書である。昭和四十二から四十四年にかけて雑誌「解釈と鑑賞」に掲載したもので、昭和初期の同人雑誌「コギト」や「日本浪漫派」時代の回想をまとめている。

文学史ではあるが、『日本の文学史』のような、上代から近代までの長期間を編年で綴ったものとは異なる。昭和初年から十年前後を一括して扱っており、通時的にみるよりも、共時的な文学運動の様態を示していると言って良い。ただし内容には、昭和四十年代、保田執筆当時の世相も含まれてくる。

書名および一般の昭和初期文学史から、あらかじめ予測できる小概念には、同人誌として「コギト」、「日本浪漫派」、文学概念として「ドイツ文学」、「マルクス主義文学」などが想定され、これは検証もできた。

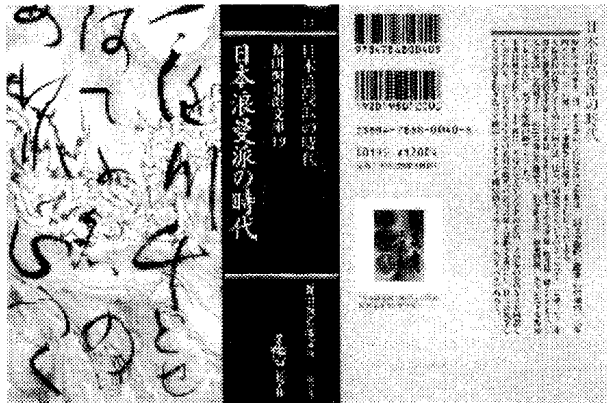
しかし、今回の調査研究での特徴として、多数の人物名についての扱いが慎重を要した。個々の登場人物をテキストから抽出し、これを名寄せする作業に時間を要した。それは無名から文学史上に残る者まで多彩だった。

試みに事例を出すと、たとえば折口信夫は、折口先生、折口博士であり、釋迢空となる。また、回想の末尾に頻出する北畠親房は、北畠卿であり、准后でもある。こういった名寄せは、単純な辞書でははかどらず、一々確認を要する。その上、文学運動の通例から、文学史や人物事典にも載らず、しかもなお保田の心中では宝玉のような友人達も多数登場する。

これらを一定のレベルで整理して、テキスト全体の構成をみる必要がある。ここに、これまでの調査研究とは異なる面があった。

2 実験・調査の目的と方法

本論の目的は、昭和初年の文学史『日本浪漫派の時代』（写真は文庫版）を、用語の頻度によって可視化し、保田の意図した記録・回想の構造を考察するためのものである。



この目的を明確にするために、あらかじめ粗く抽出した用語集合から、同人誌名などの事項名や、おびただしく表れる人物名を、名寄せし異同をただした。

その準備の上で、用語間のクラスター分析をし、意味のあるクラスターをいくつか抽出し、これを地図化

した。地図上にあらわれたパターンをテキストにあたり、小概念として確定した。つまり、図書全体を構成する小さな概念の相互の関連を把握することが、本論の目的である。

本論の方法論については、具体的に次の事例をあげて説明に代える。

たとえば、この実験によって、保田與重郎自身が文学・思想として対峙したマルクス主義について、評論家亀井勝一郎との関連が明瞭に表れた。亀井は一時期日本浪漫派の主要な同人でもあった。おそらく保田にとって、亀井については「日本浪漫派」の回想で、もっとも扱いに難しい人物だったのかもしれない。そう思わせるパターンが明瞭にでた。

ただし、そのような難しい関係の実情を、実世間で実証することが本論の目的ではない。そういう想定が可能でもあるという可視化が得られた。本論目的は、その蓋然性、そうかもしれないと思わせるパターンがテキストから立ち現れるに至った経緯を詳述することにある。

テキストは初版ではなく、新学社、1999年『保田與重郎文庫19 日本浪漫派の時代』とした。総頁が365あった。テキスト総量はおおよそ224000文字、400

字原稿用紙換算をすると560枚以上の作品である。目次を以下に示す。

1. 一つの文學時代
2. 「コギト」の周邊
3. 日本浪漫派の氣質
4. 近代終焉の思想
5. 日本的の論
6. わが「日本文學」

ただし末尾後記に、この目次構成は仮のもので、周到的な考えからの結果ではないことを断っている。

3 文章地図

まずテキストから、KT2システムで粗くいろいろな用語を取り出した。意味のありそうなもの、意味の不明なもの、そして文学概念を明確に背負った用語、さらに人名と多様だった。これらに手を加えずに整理したのが、表1である。こういった表からテキストのある程度の傾向、語彙、用字用法の全体像がつかめ、そこからより精緻な文章全体の地図を造ることができる。というよりもむしろ、テキストの中から地図、パターンが自然に浮かび上がってくる。

3. 1 用語の分類

この表1で、用語Aと、用語Bという項目の区別がある。これは用語Aが地の文にそのまま使われたもので、用語Bは括弧「」を保田が使用したものである。たとえば頻度176の、日本浪漫派と「日本浪漫派」をみると、前者は頻度が131で、後者は頻度45であった。そうしてこの場合、「日本浪漫派」は雑誌そのものを指していて、括弧のないものは、それ以外の日本浪漫派的風潮、気分、時代を指す事例が多数で、より広がりを持っていた。簡単に言えば、括弧でくくられた用語は、この場合同人誌名（固有名詞）であり、それ以外の日本浪漫派は、雑誌も含めた文学社会用語として使われている。これは頻度64の「コギト」も同じである。

総じて保田が括弧「」で括った用語は、用語概念の密度が高く、保田の中で

表1 用語の頻度（用語Bは「」付きの重点固有概念）

頻度	A	用語A	B	用語B	頻度	A	用語A	B	用語B
266	266	國			45	45	一種		
252	249	日本	3	「日本」	44	41	破壊	3	「破壊」
251	249	時代	2	「時代」	44	44	致養		
248	228	文學	20	「文學」	44	44	自身		
183	183	當時			44	44	子供		
176	131	日本浪漫派	45	「日本浪漫派」	44	44	プロレタリア		
161	151	歴史	10	「歴史」	43	43	死		
116	116	若者			43	43	東洋		
108	108	文明			43	43	生活		
103	102	世界	1	「世界」	43	43	事情		
101	101	學生			42	40	小説	2	「小説」
101	101	昭和初年			41	41	氣分		
101	101	自分			41	41	文壇		
99	96	思想	3	「思想」	41	41	作品		
91	91	文章			40	39	アメリカ	1	「アメリカ」
84	64	近代	20	「近代」	40	40	觀念		
84	83	人間	1	「人間」	40	40	仲間		
83	83	家			40	40	主義		
79	79	明治			39	39	感動		
77	77	美			38	38	學問		
75	75	マルクス			38	38	造形		
74	66	革命	8	「革命」	38	38	世代		
74	74	意味			38	38	自然		
68	68	原因			38	38	意識		
67	67	戦後			37	37	批判		
67	67	民族			37	37	詩人		
67	67	志			37	37	高等學校		
66	66	精神			37	37	歌		
65	65	文士			36	34	傳統	2	「傳統」
65	65	態度			36	35	影響	1	「影響」
64	28	コギト	36	「コギト」	36	36	詩		
64	63	大學	1	「大學」	36	36	ドイツ		
62	56	文明開化	6	「文明開化」	35	31	龜井氏	4	龜井勝一郎
61	60	青年	1	「青年」	35	35	權力		
61	61	理解			35	35	根底		
60	60	大東亞戦争			35	35	血		
59	59	表現			34	31	文化	3	「文化」
58	56	記憶	2	「記憶」	34	34	敦授		
55	53	戦争	2	「戦争」	34	34	人道		
55	55	興味			34	34	印象		
54	51	日本人	3	「日本人」	33	30	矛盾	3	「矛盾」
53	53	否定			33	33	風景		
53	53	學			33	33	情緒		
51	48	反省	3	「反省」	32	24	中谷氏	8	中谷孝雄
51	51	事實			32	32	經驗		
50	50	心情			32	32	論理		
48	48	批評			32	32	流行		
48	48	生命			32	32	存在		
48	48	アジア			32	32	傾向		
46	46	神							

一定の固有な（小）概念を形成しているものが多い。このことの分析については、参考に付録Bとして、括弧付き用語について載せた。

なお括弧付き用語とは関係なく、頻度35の亀井勝一郎と、頻度32の中谷孝雄は人名を扱う予備段階として取り扱った。高位頻度に表れた表記（たとえば、亀井）を元にして名を想定し、あらためて下位頻度の中から抽出した姓名を用語Bとした。

本論では人名や事項名について、この表1であらかじめ概略を把握した上で、より精緻な名寄せ作業を行うことになる。表1から、テキストの特徴がいくつか見られたので次に詳述する。

（1）人名の概略

人名で上位になっているのは三名で、マルクス、亀井勝一郎、中谷孝雄である。マルクスについては、保田がこの当時（昭和44年）にあっても昭和初年を回想する際、言及すべき対象なのであろう。しかし本文を見てみると、保田らの「日本浪漫派」文学運動に対する反措定の対象として言及されることが多い。保田がマルクスに親しんだのは、教養修養としての大阪高等学校時代である。ただし、マルクスはマルクス主義などの用法も多数あるので、人名という考えよりも、事項概念とするほうが妥当である。

亀井勝一郎も保田の回想にとって潜在的な反措定対象であると言える。亀井は「マルクス・ボーイ」だったが、日本浪漫派に入り、やがて脱会し「文学界」に行った。保田はこの文学界へ行ったことで初めて亀井の、いわゆる転向があったと見ている。

保田は戦後二十年間^{*6} 逼塞していたが、亀井はこの昭和四十一年に亡くなった。亀井は晩年まで、上品な西欧・日本の教養に彩られた美的評論を数多く出版し、いわゆる流行の批評家だった。当時は、私が二十代の前後で、亀井の図

* 6 保田與重郎における戦後のいわゆる「復活」は、昭和40年3月の上野精養軒での『現代畸人傳』出版記念会である。日沼倫太郎による当日の様子を、私も当時感慨深く読んだ。日沼倫太郎「保田與重郎出版記念會」新潮62巻5号（昭和40年5月）

書が書店店頭によくあることを覚えている。古美術、美的な日本回帰の一種だった。しかし「教養」とは異なる血肉化した土着性においては保田與重郎に比較することは難しく、優れた文芸教養図書の一種だったのではなかろうか。

日本浪漫派の初めごろは、龜井勝一郎氏はまだ日本の古美術について全く知つてゐなかつた。彼は後には大和の古寺などの案内記を澤山かいたが、そのころは、多分何も見てゐなかつたやうである。それだけでなく、彼のその當時の見解では、奈良時代などのわが美術を、奴隸制度のつくつたものだとし、さういふ史觀の下で否定的だつた。～（略）そのうちに龜井氏が、大和の古寺の美術などに興味をもち出し、つひには佛教の信仰を説くまでに進歩して了つたのは、多少我々との交友の結果と思ふ。しかし佛教に對する考へ方にしても、古美術に對する考へ方の上でも、私はやはりある距離を感じてゐたことを、はつきりいつておかねばならない。（近代終焉の思想）

上記で「奴隸制度」云々とは、雑誌「日本浪漫派」一卷二号にある龜井の「奴隸なき希臘の国へ」に一部表れている。だが実際には同人間の文学論争から表れた、保田の目に映った龜井を指すものと考ええる。引用文のニュアンスからみて、保田の、年長者龜井に對する眼差しには険しさがある。創刊号およびこの号の編集者はKとなっているが、編集所住所が龜井方なので龜井が主導権を持ってこの二号を出した可能性もある。

龜井氏の世代は、丁度新人會が最も旺んなころだつた。自然さういふ思考法に慣れてきたのであらう。龜井氏より數年先輩だつた中谷氏らの學生時代の教養にくらべて、ずる分異つたところがあつた。その龜井氏が初めのマルクス主義的な、あるひはマルクス主義者的な發想をなくしていつたのは、日本浪漫派を離れるやうになつてからだつた。彼がどういふいきさつで浪漫派を離れたのか、さういふ事情を誰かにいつたのか、そのどちらについても私には何の記憶もない。しかし彼が日本浪漫派を離れたころには、その考へ方の上で、殆どマルクス主義者でなくなつてゐた。事の始末では、彼は浪漫派を離れて「文學界」へ入つたのである。（近代終焉の思想）

この引用からは、保田の記憶では、龜井勝一郎は日本浪漫派の同人中、ずっとマルクス主義者だった、と言っていることになる。マルクス主義の史觀に對

峙してものを考えていた保田が、戦後の亀井勝一郎の変貌を快く思わなかったのは明らかである。

中谷孝雄は、保田にとって日本浪漫派結成当時からの「兄」という存在だった。戦後に『招魂の賦』『京は人を賤うす』『同人』など優れた作品がある。

日本浪漫派結成の主謀者は中谷孝雄である。その時彼は一人で考へてゐたのだ。これは私の知つてゐる事實である。そのころ中谷氏は「世紀」の同人だつた。「世紀」はのちに戦中戦後の文壇を形成した多くの有力な作家詩人を集めた當時新人の集團だつた。中谷氏がその中心人物であつたか否かは私は知らないが、中心者といふ觀があつた。「日本浪漫派」の結成が廣告されるまへは、漠然とした形で、新しい仲間をつくらうといふほどの口ぶりで、その時中谷氏は緒方隆士を世に出したいのだといつた。～(略)しかし彼[緒方]はそののち何年も生きてゐなかつた。彼は數篇の短篇をのこし非常に早く死んだ。彼が大切にもつてゐた潁川の赤繪の小さい壺が、久しい間中谷氏の家に残つてゐた。中谷氏の家にあつた餘分のものといふと、たゞこの一つだつた。實に貧乏の極にゐて、この人は少しも動じなかつた。(日本浪漫派の氣質)

中谷は雑誌「日本浪漫派」で19編残している。座談会1、小説2、随想7、編集後記9である。この作品の分量や、編集責任の数からみて、中谷は当時裏方に徹した人と言って良いだろう。しかしなお、本テキストの人名として高頻度で言及されるのは、保田にとって中谷は亀井とは対照的な人物だったと考えられる。

人名が上位に三名と少ないのは、多くの人物が各章節で分散し点描されていることによる。ただ、その中で三名が上位にあることは、いくつかの課題をあらかじめ示したことになる。

マルクスは、保田のプロレタリア文学への批判にともなつたものである。亀井への保田の考えは、いろいろな意味で重要だと思つた。知識と情念との関係に縮約してもよいだろう。亀井の「日本美」は知識だと、保田は言いたかつたのだろうか。中谷孝雄は「日本浪漫派」濫觴の、重要人物だった。

なお、個々章節で多数の人名が頻出するので、それは後述する。

(2) 事項名の概略と分類

表1に表れた高頻度の用語を通観し分類をした。それが表2である。分類の項目は六つにし、「その他」を加えた。なお用語の後ろに「」があるものは、括弧付き用語も含めたものを示す。各分類内容について以下に説明する。

・文学 頻度総数1385

評論家保田與重郎にとって文学とは、一つの「観」としてとらえるよりも他の日本観、時代観、文明観などを背景にした全体像であり、思想の集約した概念である。この分類の中には「日本浪漫派」「コギト」など、保田が深く関与した文学運動、同人誌を含めた。また先に説明した亀井勝一郎、中谷孝雄の二名も含めた。この場合、亀井や中谷が保田の文学に直結するというのではなくて、亀井や中谷との対峙や交友を通して、文学があったとしておく。

・日本観 頻度総数1359

保田が文学を語るとき、その根底にあるのは「日本」という国と、それを造ってきた人々の営為である。いわば日本の歴史と考えてよい。そういった日本という地縁と、時を乗り越えてという意味での「時縁」というような想いの折り重なった日本観がある。{日本人、生命、神、死、血} こういう組み合わせによって、保田の日本観が生まれ、その上部に「文学」があったと考えている。

・時代観 頻度総数1110

本書は昭和初期を扱ったもの故に、当時の時代風潮が色濃くでている。

大東亜戦争に入ってから、保田は三十を超えての懲罰的兵役召集をうけていて、この間の文学への執心は別書『日本の文学史』などに記されている。同書での北畠親房への対応の変化は、あわただしい戦時末期から敗戦後にかけてある。

表2 用語の分類 頻度32以上、99用例、5352頻度

文学	
248	文學
176	日本浪漫派「」
91	文章
84	人間「」
77	美
65	文士
64	コギト「」
59	表現
50	心情
48	批評
44	破壊「」
42	小説「」
41	文壇
41	作品
40	仲間
38	造形
37	歌
37	詩人
36	詩
35	龜井氏
32	中谷氏
1385	

保田史	
116	若者
101	學生
101	自分
64	大學「」
61	青年「」
58	記憶「」
53	學
44	教養
44	自身
44	子供
43	生活
38	學問
38	世代
37	高等學校
34	教授
876	

日本観	
266	國
252	日本「」
161	歴史「」
83	家
67	民族
67	志
66	精神
54	日本人「」
48	生命
46	神
43	死
36	傳統「」
35	根底
35	血
34	人道
33	風景
33	情緒
1359	

マルクス	
99	思想「」
75	マルクス
74	革命「」
44	プロレタリア
35	權力
327	

文明観	
108	文明
62	文明開化「」
48	アジア
43	東洋
34	文化「」
295	

時代観	
251	時代「」
183	當時
103	世界「」
101	昭和初年
84	近代「」
79	明治
67	戦後
60	大東亞戦争
55	戦争「」
51	反省「」
40	アメリカ「」
36	ドイツ
1110	

その他	
74	意味
68	原因
65	態度
61	理解
55	興味
53	否定
51	事實
45	一種
43	事情
41	氣分
40	觀念
40	主義
39	感動
38	自然
38	意識
37	批判
36	影響「」
34	印象
33	矛盾「」
32	經驗
32	論理
32	流行
32	存在
32	傾向
1051	

保田の本書での時代観とは、日米開戦に至る前の「コギト」や「日本浪漫派」の昭和の風景という意味であり、それは歴史観というよりも、もっと日常的な、文学仲間らとの肌で味わった日々の想いである。

一方、戦後および執筆当時を語る時は、アメリカの占領政策によって、国民が気がつかないほどの深層で悪しき方向に走り出した、ということを執筆当時昭和四十年前後の時代観として記している。

・保田史 頻度総数876

学生、若者という用語は、保田の執筆時点（昭和四十二～四十四年）ころの全共闘運動への言及に表れたものも多く、これらの用語が全て直接に保田自身の回顧に結びつくわけではない。しかし、学生とか若者と記す際に、自らの前半生を振り返っているのは本書全体の構成から見て明らかである。

本書の第一章には、奈良県櫻井での幼児期から大阪高等学校、「コギト」、東京帝国大学、そして「日本浪漫派」時代のことが頻繁にでてくる。特に幼児期の身辺にあったキリスト教や、畝傍中学での早熟な読書体験など、他の著述には表れない多くのことが、保田の歴史としてまとめて詳述されている。

・マルクス 頻度総数327

マルクス主義を保田がどう考えてきたのかは、興味深いことである。関係用語の頻度も高い。ただし、それは拮抗する、対峙する対象としてあったというのが妥当だろう。保田自身も知的に早熟であり、当時の中学とか高校、大学の社会的位置づけや、そこに学ぶ生徒や学生の質、その傾向は現代とは比較にならないものがある。総じて知的好奇心が旺盛だし、若者風俗としての「流行知識」がドイツ観念論哲学であり、実存主義、西欧文明観、そしてマルクス主義だったのだろう。

ここには「革命」という言葉も含めたが、この場合文脈上はマルクス主義革命ではなくて、それに対抗した別の精神的な「革命」を表している。先王の風儀を尊ぶという意味では、中国古典の意味合いが強い。だが、そのこと

は、本テキストで常にマルクス主義革命に対置的にあるので、結果的に「マルクス」の下に収めた。

ここで注意をうながしておく、保田にとってのマルクス主義とは、アメリカニズムと等値だと言うことである。下記の引用のように両者は、即物的唯物的な基底にあって、差がなかったようだ。

～（略）そのころ私はアメリカもソヴェートも一舉に碎破消却するやうな態度を考へることに、唯一の文學的立場を思つた。それは近代の政治制度の根本思想を破壊しつくし、近代の慾望的目的意識を一舉に放下することである。アメリカとソヴェートとは、その目的とする繁榮の慾望といふ點では何らの本質上のちがひもないのである。たゞ權力所在の方法としてとつてゐる政治制度だけがちがつてゐて、多少アメリカの制度が、くらしやすく自由で陽氣で、ソヴェートの方が貧困で自由がなく陰氣だといふちがひがあつたが、～（略）（近代終焉の思想）

・文明観 頻度総数295

この文明観は、独特の意味合いがある。東洋と西洋との対立構図のなかで、東洋、アジアの文明観をおりにふれて語っている。文学や政治の主義主張の枠組みを超えて、アジアの文明観が色濃くある。この点で、保田にとっては文明観が文学よりも上位概念にあると見えることもある。だが、やはり、保田は文学の人であり、文明というものを代々の文人墨客の営為の中でみることに結論が導かれる。以下の引用は「コギト」の資金を提供し続けた保田の旧友肥下恆夫が、戦後自殺したことを悼んで記された箇所である。

彼の先祖が、北にあつた大和川を、南へ廻し、そこに開拓して久しくまもつてきた田地を、彼の代になつて奪はれようとした。道をつけ、家とはいへない集團住宅をつくるために収用を強制された。その強制に抗することが出来ないといふ社會觀念の中で、彼が自ら死を選んだ心境を考へると、私にはその心懷がわかるのである。彼がコギトの父であり、日本浪漫派の母だつた所以のものを、その最後が、最も浪漫的に表現したとさへ思つたことである。それはまた道德である。その行爲は東洋の文明の本源の思ひを現し、その運命を叙した。～（略）（一つの文學時代）

・その他 頻度総数1051

残りの用語を粗わけの中では、上記した項目に含めることが難しく、その他とした。それぞれに、文脈の上で意味の彩りが変化するので、あえて文脈単位で各項目に分類することはしなかった。

(3) 用語の傾向

表2の分類内容を図1の円グラフにした。この図1から本テキストでの用語頻度の傾向をまとめておく。

図1から本テキストの傾向をみると、文学(22%)と日本観(21%)とから、両者が等量であり截然と区分できないものであることが分かる。このことから、日本観をもとにした文学であることが明白である。

時代観が17%あるのは、テキストのタイトルに「時代」とあるのだから自明であると言えようが、昭和初年、そして執筆当時の昭和四十年代初期の日本の姿が用語傾向からも実証的に表れている証左である。自明のことが自明のパターンとして可視化^{*7}されることは、本論の趣旨である。

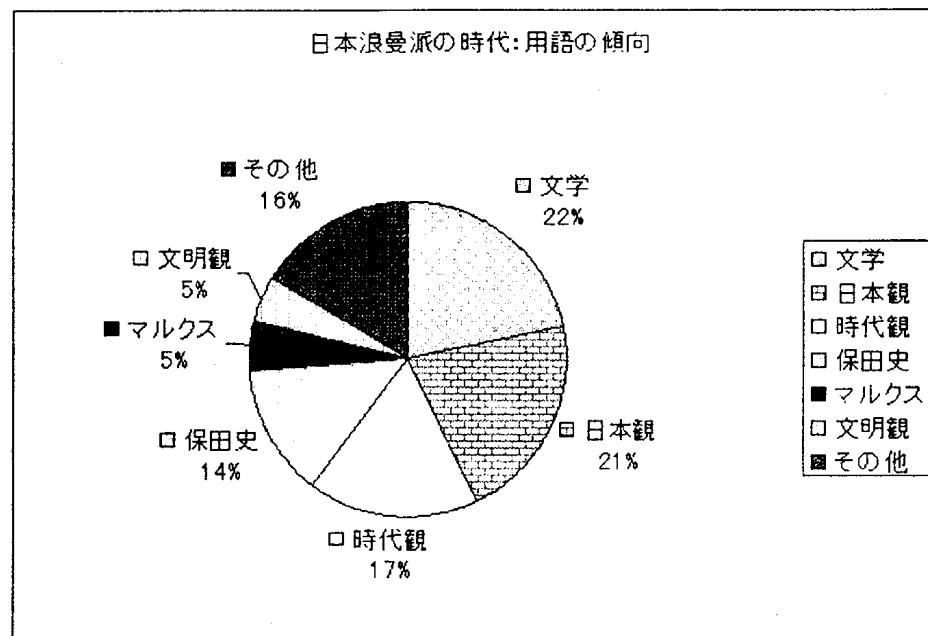


図1 『日本浪漫派の時代』用語の傾向

保田史が14%となっている。これは比較的高頻度である。彼の櫻井時代、大阪高等学校時代、東京帝国大学時代における学生生活が中心である。これはコギトや日本浪漫派が回想、青春の文学でもあったことからみて妥当である。

ともあれ、本テキストの傾向は、日本観に基づく文学と、保田の昭和初年、そして日本浪漫派時代の時代観が描かれていると、およそのことがわかる。

(4) 用語の地図化

図1では、用語の大分類から全体としての傾向を見た。この元データである表2の各々のテキスト内位置情報を用いて、地図化し、共時的傾向を見たものが図2である。

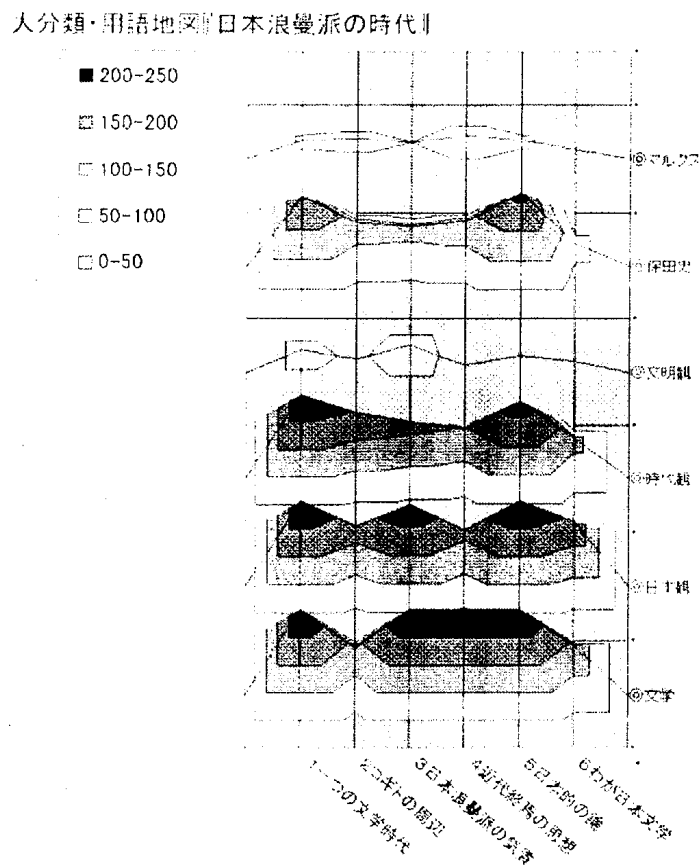


図2 『日本浪漫派』大分類・用語地図

*7 文字というメディアの頻度数から、グラフという画像にメディア変換しても、もともとの情報は、欠損少なく、あらたなメディアとして表現されるという本論の仮説は、このような自明さに表れている。

この図2は通時的に章の始まりから終わりまでを見る視点もあるが、昭和初年のことを、昭和四十年初期に執筆している本書では、「昭和初年」という共時下で何が語られているかを見るのが妥当だろう。この場合、共時的見方とはテキストのある章や節の中で用語が共起している現象を見る視点である。通時的とは、冒頭から結末に向けて、テキストの時間の流れの中で、どのように用語が表れるかを見ることであり、これは小説や編年体のものの分析に適している。この図2から幾つかのことが分かる。

- ・ 政治的背景（◎マルクス）は、2章の「コギトの周辺」と、4章「近代終焉の思想」とで言及が多い。前者は大阪高等学校時代の教養としての「マルクス」であり、後者は日本浪漫派とプロレタリア文学との相克である。
- ・ 政治的背景（◎マルクス）の減少した3章「日本浪漫派の気質」には、文明への考察（◎文明観）が充当される。同時に@日本観、@文学への言及も増加する。これは、なぜ日本浪漫派運動を始めたのかという、保田の自己省察が大きいからである。保田の文学とは、彼独自の文明観や日本観から成立しているのこのような傾向になった。
- ・ 第1章（一つの文学時代）に於いて保田の主張要素はすべて披瀝されている。これは、時枝誠記^{*8}が文章論で明快に述べていることに合致する。
- ・ 最終章では、@日本観と、@文学が強く共起している。このパターンからは、保田の文学とは、その日本観にあるといえる。

3. 2 人物と事項の認定

自然なテキストの用語には揺れがある。その揺れは著者の経験や文筆の姿勢によって意味が異なるが、総じて熟達の記事家の遺した用語用法は軽々しく扱えない。そこに著者独自の意図が込められている。たとえばある人物に、卿、翁、博士、先生とそれぞれに後接の敬称があるとき、文脈の中では一定の意味

* 8 時枝誠記『日本文法 口語篇』岩波書店、1978. p.244「～文章は何よりも表現の展開といふことが、その構造的性質でなければならない。従つて、その展開の核心となるものは、文章の冒頭であつて、冒頭が如何に分裂し、如何に擴大し、如何に屈折していくかといふところに文章の展開がある。」

表3 人物・事項の名寄せ（上位42件）

{▲日本浪漫派 181	{中谷孝雄 32	{◎北畠親房 19	{棟方志功 13	{正宗白鳥 9
{▲ドイツ文學 106	{芭蕉 30	{内村鑑三 19	{◎大谷光明 12	{大伴家持 9
{▲マルクス主義 95	{▲萬葉集 28	{◎徳川 18	{田中克巳 12	
{▲コギト 64	{萩原朔太郎 27	{佐藤春夫 16	{和辻哲郎 11	
{本居宣長 44	{藏原伸二郎 25	{鹿持雅澄 16	{契沖 11	
{▲浪漫 44	{芳賀檀 23	{▲ファシズム 16	{三木清 11	
{◎齋藤茂吉 37	{◎保田與重郎 21	{谷崎潤一郎 15	{中河與一 11	
{▲ドイツ哲学 37	{肥下恆夫 21	{▲進歩 15	{法然 10	
{龜井勝一郎 35	{折口信夫 20	{外村繁 14	{菊池寛 10	
{川端康成 33	{檀一雄 20	{松下武雄 13	{河上徹太郎 9	

の相を示している。しかし本論では、その用語の原型をとどめはしたが、その相の変異を細かく分析することはしていない。もう少し大きくテキストを把握したかったからである。

多様に頻出する用語を後述する一定の名寄せによって、その上位42件までを表3とした。なお表1の大分類表と数値が異なるのは、ここでは正確な名寄せを行った事による。

（1）人物・事項の名寄せについて

表3に表れた人物・事項の名寄せ内容は表4としてまとめた。また参考までに付録Aとして、テキストから抽出し得た、外国人を省く人名を九十数名挙げておく。この人名の扱いについては、昭和初年代文学史の範疇で、別のより精緻な分析を必要とするので、本論では省略する。

ここで扱うのは名寄せを完了した表4とするが、この中にはメモのためにいくつかの記号をつけている。

表4 名寄せ内容：上位頻度のうち、20件

{▲日本浪漫派	本居	川端氏	蜻蛉日記
「日本浪漫派」	本居宣長	川端康成	隠遁詩人
「日本浪漫派廣告」	本居學派	川端さん	{
日本浪漫派	鈴屋大人	「伊豆の踊子」	{肥下恆夫
日本浪漫派廣告	宣長	伊豆の踊子	肥下
{	宣長翁	{	肥下氏
{▲ドイツ文學	「古事記傳」	{中谷孝雄	肥下恆夫
獨逸浪漫派	古事記傳	中谷	{
初期ドイツ浪漫派	{	中谷孝雄	{折口信夫
イロニー	{▲浪漫	中谷氏	折口信夫
イロニツシエ	浪漫時代	{	折口先生
ゲエテ	浪漫主義	{芭蕉	折口博士
ファウスト	浪漫精神	芭蕉	「古代研究」
ゲミユート	浪漫的	芭蕉翁	「死者の書」
シエリング	浪漫派	{	釋迢空
シユレーゲル	{	{▲萬葉集	{
シラー	{◎齋藤茂吉	萬葉	{檀一雄
ドイツロマンテイク	齋藤茂吉	萬葉集	檀一雄
ヘルデルリーン	茂吉	{	檀君
ハイネ	萬葉調	{萩原朔太郎	檀氏
ミユース	アララギ	萩原家	{
ミュトス	子規	萩原朔太郎	
メルヘン	正岡子規	萩原先生	
リルケ	左千夫	{	
ロマンテイシズム	伊藤左千夫	{藏原伸二郎	
ロマンテイスト	{	藏原氏	
ロマンテイツク	{▲ドイツ哲学	藏原伸二郎	
ロマンテイク	カント	「東洋の満月」	
エルテル	ドイツ觀念論	{	
{	「新カント派」	{芳賀檀	
{▲マルクス主義	ヘーゲル	芳賀氏	
マルクス	アウフヘーベン	芳賀檀	
マルクス主義文學	「辯證法」	芳賀檀論	
ソビエト共產主義	デアアレクテイク	矢一先生	
中国共產主義	「虚無」	{	
劉少奇	ニーチエ	{◎保田與重郎	
劉	「ニヒル」	「偉大なる」	
劉少奇	フツサール	「偉大な敗北」	
王光美	ハイデッガー	「後鳥羽院」	
「紅衛兵」	{	「戴冠詩人の御一人者」	
{	{龜井勝一郎	「鳥見の光」	
{▲コギト	龜井君	「和泉式部論」	
「コギト」	龜井氏	和泉式部論	
コギト	龜井勝一郎	「更級日記」	
{	{	「當麻曼荼羅」	
{本居宣長	{川端康成	當麻曼荼羅	

{▲ ←事項中心の代表名

{◎ ←人名中心だが、多数の関連人名、書名などを付加している

詳細には、折口信夫を例としてあげる。

{折口信夫	{は、代表人名、事項名、かつ名寄せの始まり
折口信夫	テキスト中の姓名
折口先生	姓+敬称(先生)
折口博士	姓+敬称(博士)
「古代研究」	折口の著作名
「死者の書」	折口の著作名
釋迢空	折口の歌人名
}	{は、名寄せの終了

(2) 人物・事項の概説

次に名寄せした各人物・事項について概説する。

{▲日本浪漫派

保田らが発起人となった昭和初年代の同人雑誌である。昭和十年三月一日初号発行から、昭和十三年八月一日最終号、全29冊続いた。このうち原則として括弧付き「日本浪漫派」が同人誌を指す。また「日本浪漫派廣告」というのは、「コギト」の昭和九年十一月号に掲載された同人誌広告で、発起人に該当する関係者は{神保光太郎、亀井勝一郎、中島栄次郎、中谷孝雄、緒方隆士、保田與重郎}の六名となっている。本テキストはこの日本浪漫派時代を回想したもので、当然用語頻度は高い。「日本浪漫派廣告」内容の主執筆者は明示していないが、保田の回想では彼一人が起草し掲載したようだ。保田は日本で初めての「シュレー」の誕生として、回想時点においても誇らかだった。そういう息吹があった。

「日本浪漫派廣告」をコギトにのせたのは、私が大學を出た年の昭和九年である。私はこの年月日を忘れたが、山口基氏^{*9}が調べたものを見るとさうなつてゐる。この時廣告とは何だといはれて、廣言の廣だらうと答へたことや、衆知とは叡智のあるものの複數集合をいふのだと應待したやうなことがあつたのを覚えて

* 9 山口基氏は神田の古書店主。新潮62巻8号(昭和40年8月)に「保田與重郎」書店がある。

ある。この廣告の文を過日見て、私は體が熱くなつた。～（略）（日本浪漫派の氣質）

日本浪漫派をシユーレと見た考へ方は、今日回想しても、大方さういふ考へ方から逸脱してゐないと思ふ。今日大學の問題は斷末魔状態にきてゐるが、我々が日本浪漫派で考へてゐたやうな、「學校」を改めて考へてみられたらよいやうに思ふところがある。これは必ずしも初期ドイツ浪漫派のシユーレを考へることではなく、日本の國に千五百年來傳はつてきた教育の體制から考へたらよいことだ。傳教大師の學校や、芭蕉翁の學校も、みなその反省の教材となる。～（略）（わが「日本文學」）

{▲ドイツ文學

保田は十代からドイツ文學を教養として身につけていた。これは彼の初期著作のヘルダーリン（清らかな詩人『英雄と詩人』昭和11年）、ゲーテ（エルテルは何故死んだか、ロッテの辯明『エルテルは何故死んだか』昭和14年）への論究に明白である。

ドイツ語での「イロニー」という言葉が日本浪漫派廣告にもあり、後には、保田與重郎の存在自体がすなわちイロニーであると考えられるに至った。保田没後、雑誌「イロニア」（新学社）が12巻編纂され、またドイツ文学者川村二郎には保田を論評した『イロニアの大和』がある。イロニーとは二項対立の止揚ではなくて、二重らせんのように絡まった相を意味している。極めて現実の、実相を反映した考え方である。

つまりイロニーとは、世間の風潮、流行とは別のところで、まっとうな、正しい世界観があるという皮肉を意味している。一般に、世の流れに人は確たる自覚もなく付和雷同していく。世の流れ、雰囲気とは、その時点で現実的な世界に見える。しかし、一歩立ち止まって洞察するならば、眼前の諸現象に目をくらまされ右往左往する姿がはっきりと見えてくる。そして過去の経験を清明に見渡し、またかつてあった歴史を深く考えるなら、不易流行の前者、「不易」というものが表れてくる。

しかし、見えた者がその内容を人や世間に伝えようとしても、右往左往

する者にはただ眼前の利、明日の保身、現状への不安恐怖だけがあり、聞く耳をもたない。

存在がイロニーとは、不易というものが時期を経て後に分かることから生まれる。しかもある場合には、不易が一定の流行にもなりうる。だから、物事の実相は歴史の全体像の中ではからないと見えてこない。日本浪漫派当時の、流行とは一見逆の平安朝古典への耽溺が、日本文学の相を一貫して持続しようとする堅固な態度の表れであった。そういう事実は棺に蓋しないとわからないものである。

また趣旨は異なるが、たとえば保田が『現代畸人傳』で印象深く述べていることがある。つまり、戦中戦後最も好戦的、皇国史観の犬とまで批判された保田が、もっとも深く歴史を批判し、その私家版^{*10}を時の検閲当局から守るために、印刷を地方刑務所で行い、まず皇大神宮（伊勢内宮）に収めたというような文人墨客としての工夫は、優れてアイロニカルに思えるエピソードであった。（『現代畸人傳』番外「天道好還の理」）

こういうことの全体をドイツ文学にある「イロニー」という言葉から、自らのシュレー日本浪漫派もまた「イロニー」であると言った。

{▲マルクス主義

保田は雑誌「思想」に「『好去好来の歌』に於ける言霊についての考察——上代国家成立についてのアウトライン——」を湯原冬美筆名で投稿、採用された。年譜では大阪高等学校在学中、昭和五年(1930) 数え21歳だった。全集で11頁の小論である。エンゲルスを引用し、古代大和への侵入者を論ずるところなど非常に興味深い。また「わが神話の皇室絶対神聖思想の神秘化の為に如何に巧妙な手筈がなされたか。」という文言もあり、当時の満22歳の青年の知識がありありとうかがえ貴重な小論である。当時はこういう考え方が教養の一つであり、学生時代にこのくらいの小論がな

*10 この私家版は『校註祝詞』であろう。

ければ、論客として成立しなかったことと考えている。また、湯原冬美というペンネームで投稿したことにおかしみも味わった。

なおプロレタリア文学運動は、マルクス主義にはいれなかった。日本プロレタリア作家同盟、労農派などは別途詳細に見る必要があるので、本論では対象としなかった。ここでは教養としてのマルクス主義と、執筆当時の中国・紅衛兵運動とを主にした。

{▲コギト

昭和七年（1932）大阪高等学校時代に、同窓の肥下恆夫らと創刊した同人雑誌。年譜によれば昭和十九年（1944）第146号をもって自然終刊となっている。この間、資金の殆どは肥下に負い、このためテキスト文脈においても肥下への回想と哀悼は深い。これは本論3.1（2）・文明観、で引用した。次の引用は、「コギト」と「日本浪漫派」との違いを述べている部分である。

私の精神の上では、「コギト」の比重は、「日本浪漫派」といふ主張より、はるかに大事だった。「コギト」をどうしてつくつたか、といふことではない、単純に生れてきたものの、条件と環境をていねいに回想しておくことが、私の「日本浪漫派」説となる。他の人々の場合と少し異なるものもあらうし、また全く異つたり、矛盾する時もあるだらう。しかしさういふ矛盾は、隣國の實踐的權力説によらなくとも、我々はヨーロッパ近代思想の一時期にあつたイロニーといふことばで表現する史的知識をもつてゐた。さういふさまざまなものを、簡単にのんびりとつんだものに「日本浪漫派」があつた。（一つの文學時代）

初期「コギト」はもともと高等学校の同窓生が中心となった、純粹に私的といえる同人誌だったといえよう。他方「日本浪漫派」は、同人自身も作家、評論家、詩人として著名な人が多く、公的な雑誌だったと言える。

{本居宣長

鈴屋大人、「古事記傳」などに名寄せの工夫をした。人と作品とをまとめたのは、本論では傾向を見ることを目的としたので、両者を等値としている。

{▲浪漫

日本浪漫派、ドイツロマン派などの強い指定がない「浪漫」を名寄せした。

{◎齋藤茂吉

ここには、{アララギ、子規、正岡子規、左千夫、伊藤左千夫} 他が含まれている。茂吉については、アララギ派の「萬葉調」に関する保田の批判が中心となっている。よって、子規や左千夫を名寄せ対象としてまとめた。もちろん、齋藤茂吉を論の対象にするならばこれは乱暴である。しかし日本浪漫派を対象とする本論では、このような工夫をした。また、万葉集と万葉調とは、保田が明確に区別しているので、別途の「{▲萬葉集}」とは分けた。

下記引用は、保田がたびたび見せる和辻哲郎や齋藤茂吉に対するいらだちを自省したものである。

和辻博士の「古寺巡禮」の根底にある美観に對し、私は漠然とした抵抗を感じてゐた。しかしそれは敬しての上のことだつたので、批評に當つては親近感といふか安心感があつた。博士の血縁の者が我々の仲間にて、この青年が博士の反應を傳へた。齋藤茂吉博士に對する批判の場合も、大體似た感情を土臺とした反撥だつた。アララギ全般に對する批判として、恵心僧都や源氏物語がわからずして、どこの日本文學かといふやうな單純明解な私の立場見解であつた。萬葉集の人麻呂を神の如く思ふと同時に、私は大伴一族の、文明への憧憬やその美的雰圍氣に感動し、家持卿を詩人として尊んだ。アララギ風的美觀や文學史觀に反對したのは、開國以後の洋風美學の影響下の、一種の文明開化的發想に對する抵抗からであつた。アララギの美觀や文學史觀が、近代の政黨黨派的で、それは文明開化的だといふことは、一見奇異な表現のやうだが、私は確信を以てあへてさうい

つた上で、これを證するため、後年家持の論をかいたが、そのさき早くに後鳥羽院の御名を拜する著述を試みた。〔「コギト」の周邊〕

{▲ドイツ哲学

当初はドイツ観念論哲学、ドイツ系実存主義、ニーチェなどを区分して試したが、明瞭な結果が出ず、また保田にとってはこれもまた教養の一つであると定めひとくくりにした。なお、{アウフヘーベン、「辯證法」、デアレクテイク}などの哲学用語はマルクス主義でもしばしば基本的用語になっているので、ここに収めたことが最良とは考えていない。

{龜井勝一郎

龜井君、龜井氏との区別は、一般に人名は「〇〇氏」で記されているが、回想の中で、他の人が呼びかける際に、しばしば「〇〇君」などが使われている。本テキストでは会話文中での用例が多い。

そのころ「政治か文學か」といふことが、プロレタリア作家を中心として若い文壇の論題となつてゐた。何かいひたいところがあつたやうだが、具體的に何をいはうとしたのかつひにわからなかつたやうな結末のものだつた。龜井氏などがこの問題をしきりに論じてゐた。木山氏がある時、龜井氏にいつた、龜井君の説からいへば、僕の場合小説を止めて田舎へ歸つて村會議員になれといふことか、龜井氏はこれに答へなかつた。高圓寺の踏切の南側でとめられた時だつた、木山氏は眞面目な顔だつた。中谷氏も一緒だつた、他に綠川貢氏もゐたかもしれぬ。
(近代終焉の思想)

{川端康成

「伊豆の踊子」を収めた。川端康成は佐藤春夫とならんで、当時の保田與重郎自身や、その浪漫派運動の精神的支えとなった。

私の文學の趣味から、川端氏風の天才を、文學の理智的處置より高しとしたこと、この考へ方が日本浪漫派の一つのよりどころだつたことは、今日の研究家で

注意してくれてた者があるだらうか。この時から文壇の評価規準は變り始めたのである。川端氏的なものが大切だといふことを、私はそのころ、多少理論的に論じたやうにも思ふが、殆どそれが出来てゐないといふ記憶の方も大きい。～（略）（近代終焉の思想）

私の「戴冠詩人の御一人者」といふ本が出たのは、谷崎さんの「陰翳禮讃」の本と殆ど同じ頃だつた。この二つを並べて、川端さんが批評して下さつて、どちらも日本の美といふものをのべてゐるが、それが非常に異つてゐるのは、扱はれた対象にもよるが、年齢のちがひといふものだらう、と言はれた。三十年以前のことだから、當時の谷崎さんの年齢は、五十餘りだつたと思ふ。今日私が、日本のくらしの中から、その陰翳を禮讃する文章をかくとすれば、世のうつりと関係なしに、谷崎さんの文學とはもつと異質のものとなると思ふ。～（略）（日本的の論）

{中谷孝雄

日本浪漫派創刊発起人の一人で、保田よりも年長になる。本論3.1(1)人名の概略で述べた。

{芭蕉

保田は日本文学史上、芭蕉を万葉集に並んでもっとも高く評価する。後鳥羽院以後隠遁詩人の系譜を近世に蘇らせたという観点からである。

{▲萬葉集

保田の文学的営為の中で初期から晩年に至るまで執心し、哀惜した。戦中に『萬葉集の精神』（昭和17年）があり、没後一年目（昭和57年）に『わが萬葉集』がある。

{萩原朔太郎

詩人。実娘萩原葉子『天上の花』に若き日の保田の姿がある。

(略)～萩原朔太郎先生が、自分は佐佐木信綱博士を尊敬してゐる、同じく伊勢の學者として、本居宣長とは、かういふ人でなかつたかといはれた。萩原先生が佐佐木博士に親しみをもたれたのは、私の見解では、博士が日本文學史に一つのイメージを形成されてゐた點にあつたと思ふ。現に萩原先生は、自分が新古今集といふやうな文學を知ることが出来たのは、佐佐木博士のおかげだと斷言された。～(略)萩原先生は、自分が河内の産だつたのが、自分の文學の上で幸ひしたと、その同じ時に仰言つた。萩原家は、河内の大和川沿にて、代々醫の名家だつた。この村の農地の大方は飛行場となり、村落だけがそれに隣接したまゝで今も残り、その家は、戦後も醫家としてあつた。(日本浪漫派の氣質)

{藏原伸二郎

詩人。戦前に詩集『東洋の満月』、戦後晩年に『岩魚』がある。

(略)～藏原氏を知つたのは、そのさき彼が中谷氏らと「世紀」といふ雑誌を出してゐて、その「世紀」を通じて知つたやうに思ふ。そのころは高圓寺の南の松ノ木の方にゐたやうに思ふ。藏原氏が一番南で、中谷氏が堀ノ内、次に木山捷平氏が高圓寺の驛の南にゐた。駅を北に出ると、私の下宿のつい一町も離れないところに古木鐵太郎氏がゐた。私の家との間はかなり廣い空地だつた。「東洋の満月」が「コギト」へのせられたのは、やはりそのころで、これは藏原氏が詩稿を私のところへもつてきた。その詩稿といふのは、一度雑誌に發表されたもので、「コギト」へ出すより十年も以前に書かれたものだつた。(略)～(近代終焉の思想)

{芳賀檀

評論家。ドイツ文学。ドイツ留学を経、ニーチェをよくした。「矢一先生」とは父親の東京帝国大学教授芳賀矢一を指す。芳賀は日本浪漫派に14編の作品を残している。

ドイツから歸つた芳賀氏は、かつてない目ざましいものとして出現した。うはべには啓蒙をとなへながら、その本質は全く別のものだつた。彼はドイツの何かを移入したのでなく、芳賀檀その自體を示したのだ。當時の日本の文藝批評家の優秀な人々は、殆どどこかの外國文藝系統の教養を身につけた人々だつた。彼らはこの時の芳賀氏の文章をみて、これは何を翻譯したのかといつたといふ事實は、

當時の芳賀氏の異質性と、同時に日本の文壇のある機微を巧まずして告白した観がある。(わが「日本文學」)

{◎保田與重郎

保田の自著作への言及を含めた。

{肥下恆夫

保田の大阪高等学校時代同窓生。146号まで続いた同人誌「コギト」は殆ど肥下の資産からでた、と保田は記している。

私は肥下と高等學校の同窓だつた。肥下が一年休學したから一緒になれたのだつた。この出會が、私の文學時代の發端である。もしその時肥下にあふことがなければ、コギトは出なかつたかもしれぬ。コギトは大阪高等學校のわがクラスの仲間を出したもののだが、よく英才がそろつてゐた。しかしこれは當時高等學校一般の風だつたかもしれぬ。肥下は、生活にも教養にも、非常にハイカラだつたが、その意識の根底に、驚くべき古い國土の風習を藏してゐた。～(略) この肥下がコギトを出す時、西域探檢の河口慧海師の援助をうけたといふのは、間違ひである。私がいつたのは、慧海師の旅行に當つて、肥下の先代が援助した、といつたことを、誰かがあべこべにきいたのである。(一つの文學時代)

{折口信夫

作品『古代研究』、『死者の書』および詩人としての「釋迢空」も含めた。保田は折口の『古代研究』に影響を受け、また、折口は『死者の書』を保田の「當麻曼荼羅」から想を得た。

(略) ～折口信夫博士が「死者の書」をかゝれてゐて、まだ發表にならなかつた時、「當麻曼荼羅」の影響をうけまして、と冗談をおつしやつた。「影響」とおつしやつたので、私は非常におそれ畏んだ。折口先生は少年時代から當麻とは殊にふかい因縁があつて、當麻の歴史の何千年を、その時、その世のまゝ、風景として回想できるやうな方だつた。私のかいた「當麻曼荼羅」は、文學よりも美術の史論に似たものだが、「コギト」の初めにかいたもので、雑誌に出た時、中河與一

氏が手紙を下さつた。氏の感懷を美しくかゝれてゐたのが、うれしかつた。(略)
 ～ (日本的の論)

{檀一雄

保田の親友としてもっとも身近な人物と思われる。檀一雄への追悼文「誄辞^{るいじ} (しのびごと)」*11にすぐれ、また「檀一雄君能古島文學碑銘」(全集別巻一)がある。この誄辞は私も長年印象深く、時に反芻してきた。

「～ (略) 人生永劫の寂しさを思索體現した、近來無双の詩人なるかなと、私は君の文学の信実と文人の勇氣を讃へんと、君の言葉で語りつつ、幽明にこの一線のあることが不思議となる。死とは何であつたのか、檀一雄君。」昭和五十一年一月十日。

こういう追悼文を保田は檀一雄に贈つたのである。

しかし日本浪漫派の方は、コギトのさういふ外觀にくらべると、粗野なほど活撥だつた。一つの運動との意識があつたからだらうし、また同人の形成が、ずつと廣く一般化してゐたからであらう。さういふ日本浪漫派の中でも、一番明瞭に果敢な氣分を現したのが檀一雄だつた。東京帝國大學の經濟學部に在籍してゐた檀氏は、始め私小説風な作品をかいた。非常に緻密な味のあるおちついた作品で、大學生の作品とはおもへぬ名作の傍をもつてゐた。しかもその反面で、極端に放埒な作品に、異常な人間感情を描いて、西南の志士たちの傳統とした氣風を横溢させることも出來た。この兩方の極端の間で、矛盾も、疑懼も味はない一種の八方破れの構へが、彼の身上であつたとともに、そのころの我々の氣風や氣分を現してゐた。(日本浪漫派の氣質)

4 クラスター分析

クラスター分析をつかつて、表4にある人物・事項に関する用語集合の関連

*11 保田與重郎「誄辞」ポリタイア、檀一雄追悼特集号、昭和51年7月。

をみた。この手法^{*12}については従来行ってきたものである。図3により、いくつかの明確なクラスターが見えた。

4. 1 人物・事項のクラスター分析

この図3（デンドログラム^{*13}）は4.2で後述する概念地図が、用語の位置情報から、用語の出現パターンを二次元表示することに比較して、位置情報の隣接度計算結果として用語集合間の類似度を導き出している。

その類似度とは、各用語間にどのくらいの隣接共起があるのか、どういう用語が文章の中で隣接して使われているのかという指標である。つまり、そこに意味的な処理はない。結果のデンドログラムに関してテキストにあたり、クラスター^{*14}の意味を類推し、付与することになる。

本論でのクラスター分析の目的とは、すなわち、あらかじめ用語の意味を勘案するものではなく、用語間共起の結果として、共起した用語は相互に意味上のなんらかの関連があるかもしれない、と推定することにある。その結果として、分析で得られたクラスターという指標をもってテキストにあたり、そのクラスターの有効性、妥当性を計ることにある。

たとえば傾向として、コギトという用語と、肥下という用語が近い文中で頻繁に同時に表れたなら（強い共起）、一目でわかるクラスターがデンドログラムに表れる。そこで、このコギトと肥下とは関連が強いとみる。だが、そこから肥下が「コギト」創始者の一人であり、財政を負担した人物であるとまでは、図3から出てこない。クラスターを構成しているコギトと肥下には、何かがあるという指標に過ぎない。テキストに当たったときはじめて、肥下はコギトを創刊した、と人が判断するわけである。

以下に、図3からいくつかのクラスターを認定し、名前をつけて考察する。

*12 脚注4にある、谷口敏夫、三島由紀夫『豊饒の海』の分析に詳しく述べた。

*13 デンドログラムとは、樹形図と翻訳できる。

*14 クラスターとは、デンドログラムに表れた、要素間の明瞭な「まとまり」

クラスター▲日本浪漫派

このクラスターは {▲日本浪漫派、▲ドイツ文学} から成立している。距離からいうと二つは経験的^{*15}に意味のある限界近くで類似度が高い。テキスト、及び昭和文学史の実証からは、日本浪漫派がドイツ文学を基盤に持っていることは明瞭なので、このクラスター▲日本浪漫派は、テキストの中で自然に形成されたと言ってよかろう。具体的には、保田は日本浪漫派を語るとき、常にドイツロマン派を含むドイツ文学と共時的に語っているとなる。抽象的には、保田の脳裏に、日本浪漫派とドイツ文学とは二つが組になっていると推測できる。ただし、他のクラスターに比較するなら、その程度は限界付近といえる。これは他方、保田にとってのドイツ文学は背景に隠れている、深層にあると言ってもよいだろう。

「コギト」で培はれた氣風が、日本浪漫派の一つの根幹になつたといふことは、何人も否定しないだらう。日本文學の系譜をうちたてるといふことと、初期ドイツ浪漫派の心情を、純粹な形で變貌しようといふ「コギト」の主たる願望を、私らは實現の緒に導いてゐた。初期ドイツ浪漫派の原初のもの、即ちシュレーゲル以前、ゲーテやヘルデルレーンの流動してゐた氣分からかき起すといふことは、昭和初年代の青春の意味から、いはゆる近代と近代文學の發生に遡るその世代の我々の方法だつた。(略)～(日本浪漫派の氣質)

クラスター▲マルクス主義

このクラスターは {▲マルクス主義、亀井勝一郎} から成立している。経験的にこのクラスターの二つの要素関係は高い。保田は亀井勝一郎を語るに際して、亀井の転向問題や、彼がマルクス主義に深く傾倒していた記憶の中で考える事が多いのだろう。

私は中谷氏を知るより先に、その夫人の平林英子女史を知つた。それは龜井勝一

*15 図3下部のユークリッド平方距離が相対的に離れた地点でグループを閉じるにしたがって、共起の意味を減衰すると言ってよい。本論の場合、せんじ詰めれば有限のテキスト空間での実験なのだから、テストした用語間に共起が零はあり得ない。

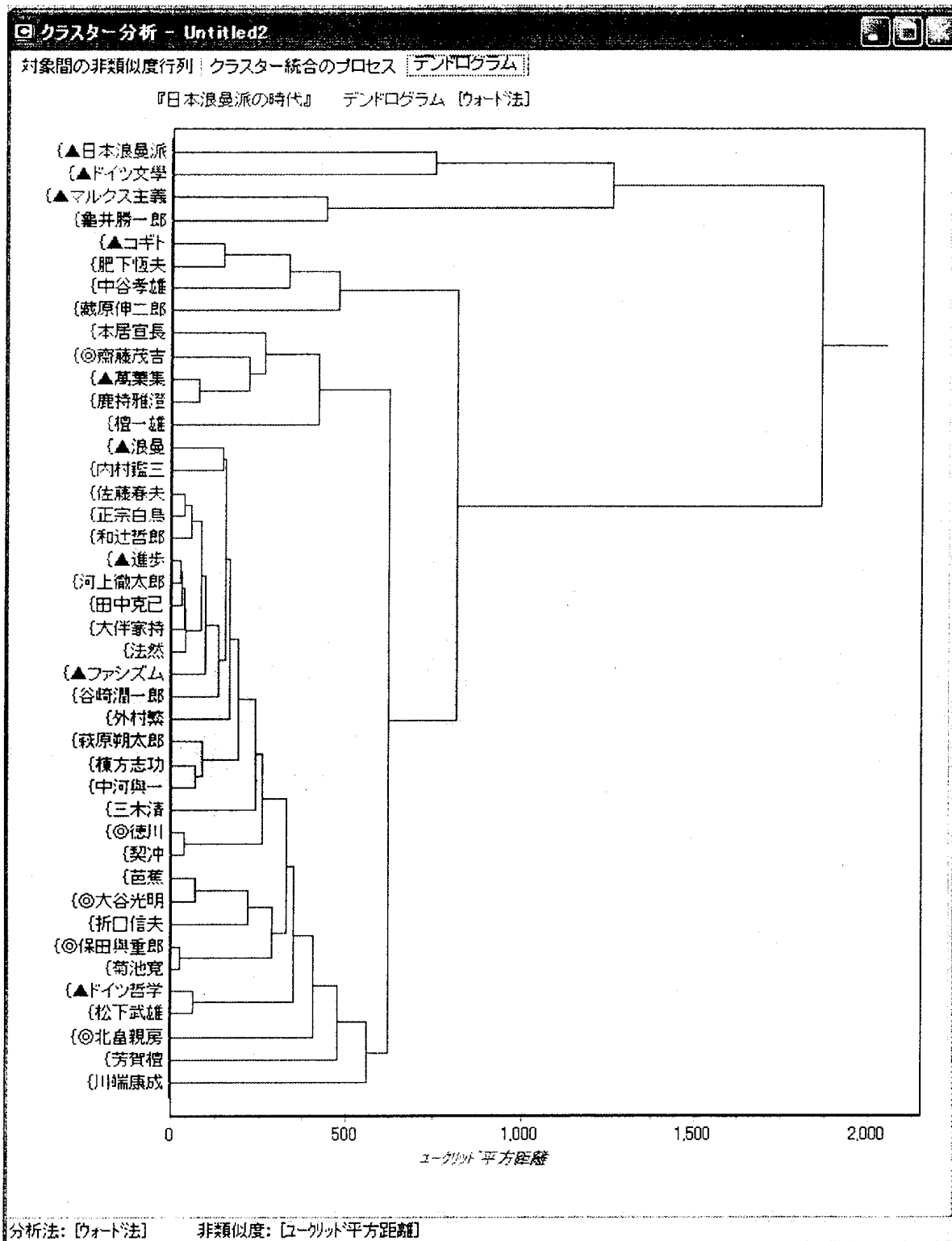


図3 人物・事項のクラスター分析

郎を通じて英子女史を知ったやうに憶えてゐる。そのころ龜井氏は、共産黨をやめて、プロレタリア文學の作家同盟の仲間に入つてゐたから、英子女史とは、そこで知つて親しかつたのであらう。龜井氏は温雅な一面ももつてゐたので、性行や世渡りの面で粗野なところの多い人々とのつきあひは不得手だつたやうである。

そのころの作家同盟は、國際的な連絡をもつた文化團體といつてゐた。また戰闘的とか革命的といふ名稱を、その團體名の上に冠してゐたが、實際それに加つてゐる人々のうち、どの程度さういふ捨身の心境を土臺とした上で、口舌の世界を泳いでゐたものか、そのころも今も、私はおぼつかなく思ふのである。

龜井氏は學生時代に、共産黨青年同盟の黨員になつたため、禁獄されたと本人からきいた。獄中ではゲエテのフアウストに讀み耽り、それを暗誦するに至つたともいつた。當時のいはゆるプロレタリア・リアリズムが、氣分的にしつくりせず、そのうへ考への上でもいやになつたのであらう。その學生時代、東京の銀座などで、人がやたらに集つてゐたり、何かのことで多數の人が走つてゆくと、革命が始つたと思つたともいつた。(日本浪漫派の氣質)

クラスター▲コギト

このクラスターは {{ {▲コギト、肥下恆夫}、中谷孝雄}、藏原伸二郎} から成立している。▲コギトと肥下恆夫とが密接なのは、同人誌「コギト」の資金提供が肥下によってなされていた事実からくる。保田の肥下への哀悼は深い。中谷孝雄および藏原伸二郎は、地縁が大きいと考えられる。またコギトに掲載された日本浪漫派広告には、中谷孝雄が発起人となつてゐた。こういう実情から、クラスター▲コギトが形を見せたと推測できる。

私は棟方氏と道で知り合つた。先方もさう思つてゐる。しかし正式には藏原伸二郎氏がひき合せてくれた。この二人はいづれも私の大先輩であり、教師だつた。當時中谷氏も高圓寺にゐて、この人々を私は勝手に教師として尊敬し、今も心の昂ぶる恩恵をうけた。

しかし私が高圓寺へ移つた發端の原因は、肥下恆夫が當時、高圓寺の西北の大和町に住んでゐたからだつた。肥下氏が高圓寺へ居住したのは、大學へ入つた當座、たまたま家をさがして高圓寺の驛を北へ出て、通信學校の訓練用の空地にかゝると、そこで晴天の霹靂にあつた。(近代終焉の思想)

クラスター▲万葉集

このクラスターは {{本居宣長、{◎斎藤茂吉、{▲万葉集、鹿持雅澄}}}}、檀一雄} から成立している。◎斎藤茂吉は、保田が考える万葉集とアララギ系の万葉調との対比によって類似度が高まっている。宣長は国学のとらえた万葉集から近接距離を持つ。しかし檀一雄については明確な答がでない。

「古義」は土佐の雅澄翁が、近世國學とその萬葉學を綜合された大著作である。その訓釋から、私は萬葉と王朝文學が、一筋の緊密のものとなることをさとした。これは眞淵の丈夫ぶりの考へ方と、その色調に非常なちがひがある。後年、私がアララギ風の萬葉調主義をあくまで批判したのは、かういふ中學生の讀書に原因があつたかもしれない。そのころのアララギは、單に歌壇を支配した大勢力といふにとゞまらず、日本の文學史觀とさらに美學をも支配してゐた。その萬葉調主義が、日本の文學史をあやまり、日本の造形を誤解させる最大のものと私は考へた。固有日本の美觀に立脚するかゝの如き外觀をもち、氣質的にも多分にさうであるものを、わが美觀の上からは、「文明開化」の一變型だと斷じた私の考へ方は、そのころも、殆ど理解されなかつた。かういふ私の感じ方を、つよく實證的に理論づけてくれる暗示が、「古義」にはその文學史觀として充滿してゐた。(一つの文學時代)

4. 2 人物・事項地図に表れた小概念

図4は、クラスター分析した結果から得た用語間の類似度による近接の程度を、等高線地図の用語並びに適用したものである。具体的には、図の右端上端に表れる項目、{▲日本浪漫派、{▲ドイツ文學、以下の並びは図3から得たものである。すなわち図4の横軸は文章の通時性によって一意に確定し、縦軸はクラスター分析の結果から、用語間の位置の近接度を用いた。

この図4からいくつかの小概念が想定できるわけだが、その前に本テキストが時代毎の文学史でもなく、構造の強固な小説でもないことから、地図の見方を新たに設定しておく必要がある。これまでの実験では、小説や時間軸の堅固な文章はこの図4から共時性、通時性、この両方向によって分析するのが妥当であった。

本テキストではまず、時系列の推移、すなわち下部にある節指標数字*¹⁶の流れからテキストを見ても、全体の概念をつかみにくい。本文テキストの前後関係が回想の実時間を表しているわけではなく、テキストの時系列にはそれほど重要な意味を持たない。昭和十年代を語りつつ、執筆当時昭和四十年代の世相を懐かし、さらに幼少期の断片記憶を想起する。このような様態を持つテキストに、通時的考察は二次的なものとなる。

それに代わって共時性、すなわち、ある用語が頻出したとき、それに関連してどのような用語が使われているのかという共起の考察が、今回テキストの様態に合致している。共時的考察とは、ここでは用語間の共起を観察することである。

具体的には、多少の前後関係を用いるにしても、この図4では縦の軸、つまり下部の節指標数字ごとに定規をあてて、その線上にどのような用語が頻出しているのか、これを見ることに重きを置く。そのときに共起した用語、すなわち共時的用語の集合をもって、「小概念」ととらえてみる。

以下では、4.1で抽出したクラスターを基本に考察する。

クラスター▲日本浪漫派の共時性

図4から、節指標の1～最終まで、▲日本浪漫派、▲ドイツ文学、この両者は間断なくテキストに現れる。さらに注意してみると、▲マルクス主義、そしてやや山が小さいが▲コギト、また中段にある▲浪漫、この四つの用語集合がテキスト全域に表れていることが分かる。

一方、この四つは時系列にそって間断なく表れるのだから、これと共起する別の用語には、原則として、深い意味があるわけではない。いつも、この

*16 節指標数字と名付けたのは、本対象テキストが、六章構成であることは明確だが、各章内での「節」に該当する指示は、空白行だけで行われている。しかし、空白行は判面の構成によって変化したり、分明でないこともある。よって、一応のよりどころとして、空白行を節と見なし、全体を1～91の「節指標数字」として整えた。なお、あらためて「章」に重きを置かなかったのは、本図書末尾にあるように「章立て」が著者の意志でなされたわけではないこと、および、内容的に章立ての意義を積極的に見いだせなかった私自身の判断による。前後関係や階梯をへた論述に煩わされず、自由気ままに記された回想、その分作偽や虚構のない自然文と考えた。

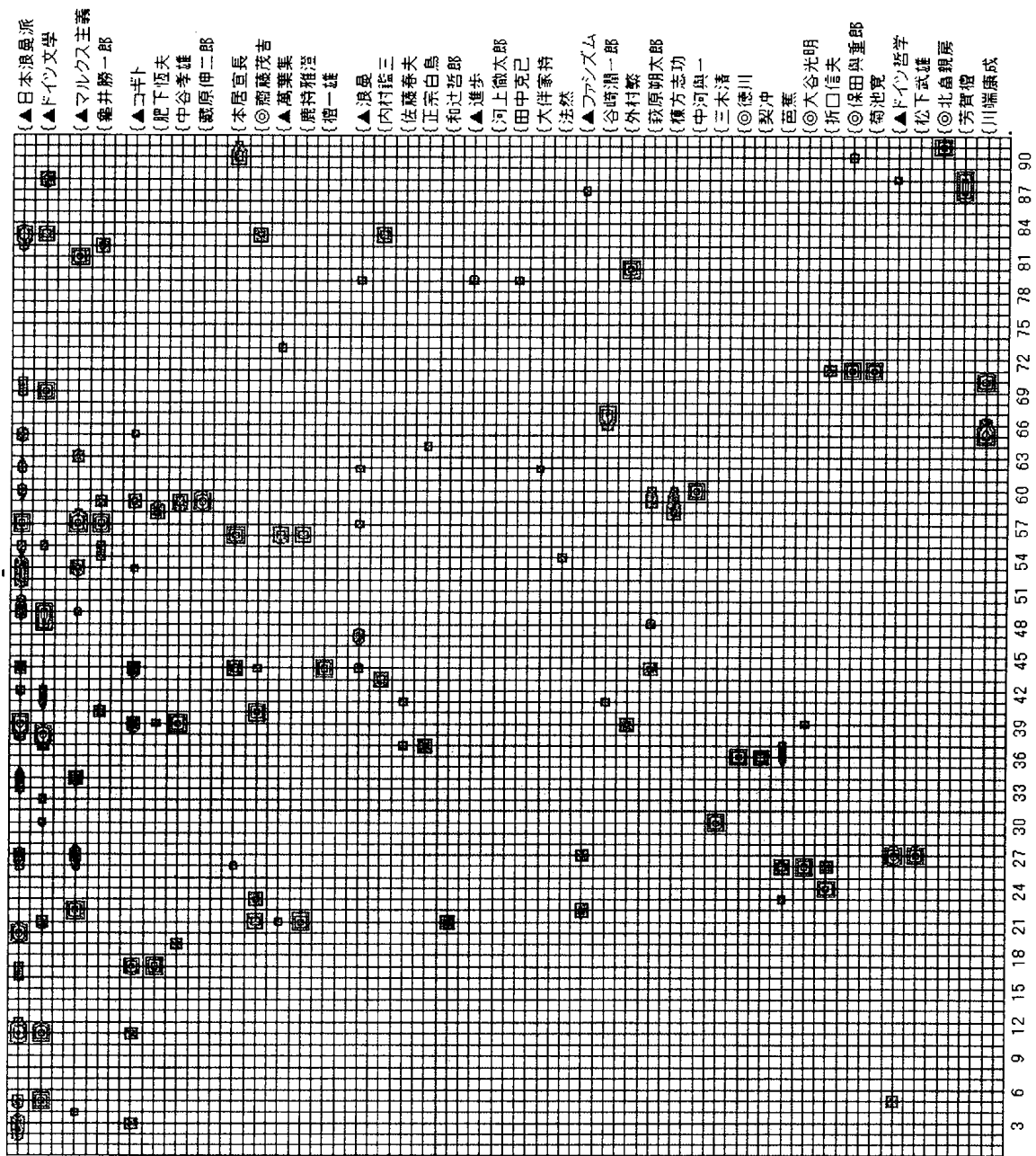


図4 人物・事項地図

四つの用語群がテキストに、他の用語と共に起してある。

別の言い方をするならば、このテキスト全体は {▲日本浪漫派、▲ドイツ文学、▲マルクス主義、▲コギト、▲浪漫} で、主調を形成していると結論づけてもよい。これは客観的に、五つの小概念を統合して、『日本浪漫派の時代』が語られたと言い切ることができる。

クラスター▲マルクス主義の共時性

{▲マルクス主義、亀井勝一郎} によって成立するクラスターは、節指標57や、81、82での共時性から、強い関連を示している。これは本テキストに表れた強い小概念としてよいだろう。つまり、保田與重郎にとっては、マルクス主義を考えたとき（筆にしたとき）、亀井勝一郎が想起される、あるいはその逆でもよい。保田はおそらく亀井の転向問題に深い考えを持っていたのだろう。テキストによれば、亀井は日本浪漫派をいつの間にか脱退し、「文学界」に行ったとき、はじめて転向を完結したと述べている。この間の事情は、実時間として執筆時点に該当する節指標81、82でもほぼ同じ様態として記されていることから、保田の亀井に対する負のまなざしは深い。保田の執筆時点、亀井勝一郎（明治40～昭和41）は亡く、世間流行として亀井勝一郎賞^{*17}も始まり、よく知られた評論家であった。

クラスター▲コギトの共時性

4.1で {{ {▲コギト、肥下恆夫}、中谷孝雄}、蔵原伸二郎} この四項目がクラスター分析によって自動抽出された。ここで、図4を詳細に見、縦の軸に注目してみると、三箇所の顕著な共起が発見できる。

節指標17では、{▲コギト、肥下恆夫、萩原朔太郎} が見える。

節指標39では、{▲コギト、肥下恆夫、中谷孝雄、外村繁、萩原朔太郎、◎大谷光明} が見える。

*17 亀井勝一郎賞の第一回受賞者は、川村二郎『限界の文学』である。

節指標59では、{▲コギト、肥下恆夫、中谷孝雄、蔵原伸二郎、萩原朔太郎、棟方志功、中河與一} が見える。

このことからテキストにあたると、同人誌「コギト」というのは、肥下が大阪高等学校時代の同窓生で資金援助者という、保田との親友関係と、他の人物たちがいずれも、東京での保田の地縁、同じ場所に住んで行き来があったという事実が分かってくる。その中で、蔵原伸二郎については、彼の詩集「東洋の満月」がコギトにまとめて掲載されたことにより、▲コギトという小概念の一つの要素となったといえる。

クラスター▲万葉集の共時性

このクラスターについては、『日本の文学史』の分析^{*18}において万葉集の重要性をすでに絵解きした。保田にとっての「文学」とは、万葉集と芭蕉、そして後鳥羽院につきすることは明白である。

ただし檀一雄がなぜここで共起するのは、テキストからみておく。節指標44で明確に共起する用語は {▲日本浪漫派、▲コギト、本居宣長、◎斎藤茂吉、檀一雄、▲浪漫、萩原朔太郎} である。▲万葉集は入っていない。図4からは、この節指標44で一番大きなパターンは檀一雄である。このことから、檀一雄を語るには本書の主要な概念が相当数必要になるくらいに、檀の存在が幅広いものであると推定できる。章中「日本浪漫派の気質」の檀一雄は、コギトの少し気取った同人氣質よりも、荒々しい日本浪漫派だったと記されている。檀一雄が特異な存在だったことがうかがえる。

ある時私らは數人で、飲食を共にしてゐた。その席の談論が無遠慮になつたはてに、中村地平が、檀氏の小説を批評し出した。要するに檀氏の作品には、中村氏の思ふやうな切なさがないといふ話だつたが、若干のことばのやりとりがあつて、中村氏は、自分は檀君の文學は認めてゐないといつた。それがその場の結論か、平素からの因縁があつてそのやうなことになつたのか、私にはその事情がわからなかつ

*18 脚注1を参照。

た。檀氏が異常に昂奮した上に、一座も白けたので、私は檀氏をひつぱつてその家の庭園へ出た。すると檀氏は、昔はよかつたな、古人のやうに大刀を帶してをれば、こんな時たちどころに決闘し得たのだ、しづかにかういつた。(日本浪漫派の氣質)

5 まとめ

これまでのテキスト分析に比較して今回は、時系列の変化すなわち通時性をみるのではなくて、用語の共時性、つまりテキストのある箇所、どのような用語が共起しているかを重点的にみることになった。

本論ではまず3章1において、テキスト『日本浪漫派の時代』で用いられている事項・人名用語を粗く抽出し、およその傾向をみた。表1のように、明瞭な事項として「日本浪漫派」「コギト」が上位を占めた。人名には、マルクス、亀井勝一郎、中谷孝雄が上位を占めた。人名が多数上位に昇るだろうとの予測に反して、三名なのは、各章節に人名が分散していることによる。事実、具体的に付録Aに示したが、日本人名だけでも九十余名があがっている。

図2ではこの用語群を手技で大分類し、その結果を地図化した。「@文学」や「@日本観」に分類した用語が終始用いられていることが明瞭で、かつ冒頭で言ったように、時系列による変化が小さい事がわかる。この段階で、通時的分析よりも、共時的分析に重きをおく方針が明確になった。これは、重要な因子である特定人名が、最初から最後まで常時表れるのではなく、個々の章節でまとめて回想されるという保田の執筆方針によって、そうなったものである。しかも、その範囲が『日本の文学史』に比較して短期間であり、極論すれば昭和初年代の一時期に限られてくる。

次に3章2では、この人物と事項とを詳細にしらべ、異同をみた。そうして、事項・人名、あわせて表4にある頻度の高い上位20件を調査対象とした。

4章1ではこの20件の用語群をクラスター分析し、そこから4つの大クラスター {日本浪漫派、マルクス主義、コギト、万葉集} を識別し、図3に挙げた。テキストにあたるまでもなく、これらのクラスターがテキストを代表する概念

であることはこの時点で明白となったが、重ねてテキストを分析することにより、その実証を得た。

最後に4章2で、同じ20件の用語群を地図化し図4を得た。この図4を先に得た4つの大クラスターを元に分析し、それぞれ論述した。その結果は以下である。

(1) クラスター▲日本浪漫派の共時性

時系列に関係なく間断なく表れる。そして {▲日本浪漫派、▲ドイツ文学} という用語集合が本テキストの主調である。

(2) クラスター▲マルクス主義の共時性

保田におけるマルクス主義（文学）とは、本テキストでは日本浪漫派同人の一人、評論家亀井勝一郎との対峙によって鮮明化している。

(3) クラスター▲コギトの共時性

日本浪漫派時代の前身ないし基底とは、同人雑誌「コギト」であり、その主要な人物は大阪高等学校同窓生肥下恆夫である。

(4) クラスター▲万葉集の共時性

万葉集が保田の文学では最も核になるのは既に実証済みである。ここでは、あわせて交友関係として、檀一雄との関係の深さが類推できた。

以上のところまでテキストを分析し、副次的に分かったことは、昭和初年当時の文学における「地縁」は文学運動その他の大きな要因の一つであろうという確認であった。たとえば、節指標59に並ぶ人名、{亀井勝一郎、肥下恆夫、中谷孝雄、藏原伸二郎、萩原朔太郎、棟方志功} は、コギトや日本浪漫派の同人であると同時に、大多数が当時東京の、保田の近辺に住んでいた者達であるという視点が成り立つ。

最後に、本論で得た三つの結論を記しておく。

- (1) 保田與重郎にとっては亀井勝一郎との対峙が比較的重い。ただし、保田が本書を執筆した前年に亀井が死去したこともあり、そこからの回想もあると考えておかねばならない。

- (2) 亀井とのことでも分かるように、日本浪漫派は決して強固な同人とはいえ、それぞれ才能のある文学関係者が多数集まったという事実が本テキストからも伺える。その理由のひとつに、日本浪漫派同人太宰治は本テキストでも言及が非常に少ない。檀一雄、芳賀檀などに比較して明確である。

別の調査^{*19}では、雑誌「日本浪漫派」での執筆関与記録を見るならば、亀井勝一郎42点（内編集後記11点）、保田與重郎30点（内編集後記1点）、檀一雄19点、芳賀檀14点、太宰治10点と、太宰治の同人への寄与は決して小さいわけではない。

- (3) 保田與重郎は彼自身の発想として、大クラスターにあげた概念をそれぞれ包含していたと考えられる。その観点からみるなら、万葉集→コギト→マルクス主義→日本浪漫派→万葉集、という保田自身の精神の流れがわかる。

謝 辞

データの整理について、坂口昭代氏（京都光華女子大学 真宗文化研究所）のご助力に感謝いたします。

*19 あらかじめ雑誌「日本浪漫派」の目次情報を整理してあるので、この著者名索引から概数を出した。

<http://www.koka.ac.jp/taniguti96M/0/40/Biblio/NRomanNew/NRomanAuList.html>

付録A 同定した人名表

テキストから抽出した人名のうち、同定が可能だった名前は外国人を省きおおよそ90余名となった。これを以下にリストする。並びは旧漢字が元となっているのでJIS漢字記号逆順とした。

青野季吉	末永節	芭蕉	大谷光明	三宅雪嶺
清水比庵	本居宣長	乃木希典	大宅壮一	三浦義一
龜井勝一郎	堀辰雄	楠公	大山定一	佐藤春夫
藏原伸二郎	堀場正夫	内村鑑三	太宰治	佐佐木信綱
與謝野	北野正男	藤田元春	早川孝太郎	高島素之
齋藤茂吉	北畠親房	棟方志功	川端康成	工藤芝蘭子
浅野晃	北川台輔	土井晩翠	折口信夫	胡蘭成
圓空	北一輝	田中克巳	西田幾多郎	古木鐵太郎
和辻哲郎	芳賀檀	天野貞祐	西郷南洲	契沖
鈴木重胤	法然	長嶋秀顯	正宗白鳥	宮崎滔天
林房雄	米田太三郎	中條百合子	神保光太郎	吉田松陰
良忍上人	平澤興	中島榮次郎	上田秋成	吉川英治
淀野隆三	平林英子	中谷孝雄	松下武雄	菊池寛
柳田國男	福沢諭吉	中村地平	小林秀雄	岸信介
柳宗悦	服部正己	中河與一	緒方隆士	外村繁
野長 正夫	肥下恆夫	池谷信三郎	鹿持雅澄	河上徹太郎
木曾義仲	伴林光平	檀一雄	志賀直哉	岡倉天心
木山捷平	伴信友	谷崎潤一郎	山田孝雄	横光利一
蓑田胸喜	萩原朔太郎	大伴家持	三木清	伊藤静雄

付録B 括弧付き用語のクラスター分析

テキストにはたとえば、コギトと「コギト」のように括弧付けの用語がある。括弧付けが著者によってどれだけ意識されたものかは不明だが、一般に何らかの強い意志で付ける事が多い。よって試験的に括弧付き用語だけの頻度を得、本主論と同じ実験を行った。

そこである一定の結果が出たが、括弧のあるなしによる著者の考えの違いをまだ十分に検証できないので、後の課題として現時点でのクラスター分析の結果を以下に付録とする。

付録B表は、括弧付き用語の頻度4までをあげ、総計23件を得た。

付録B図は、この付録B表をクラスター分析しデンドログラムを作成した。

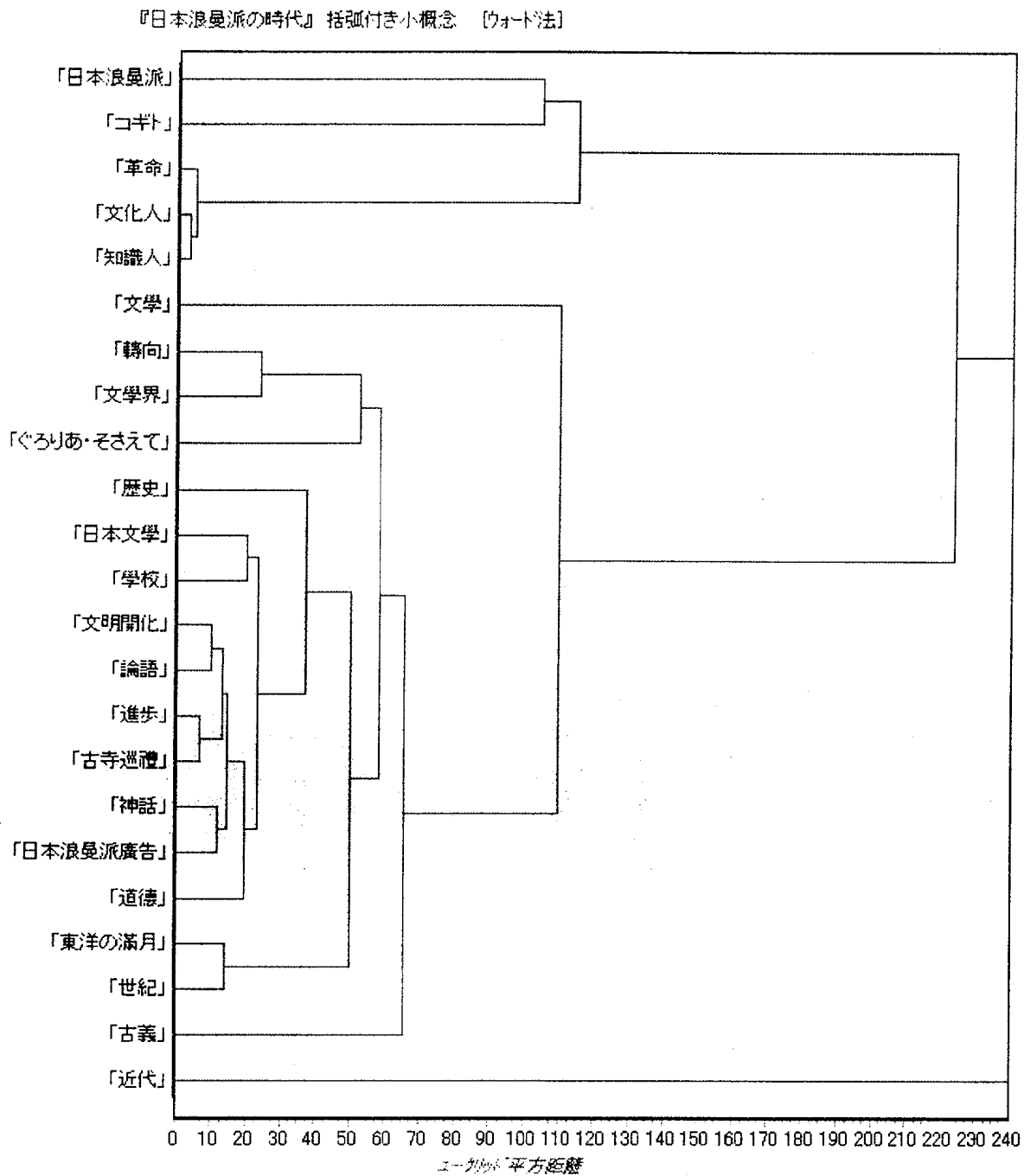
試験的にこの分析に考察メモを残しておく。詳細は省く。

1. 「日本浪漫派」、「コギト」 クラスター（以下略）は妥当である。
2. 「革命」、「文化人」、「知識人」は、「革命」と後者集合とを対峙させているので、意味的には反発するクラスターとして表れている。
3. 上記1と2とは、すなわち {「日本浪漫派」、「コギト」、「革命」、「文化人」、「知識人」} であり、緩いクラスターを形成するが、2と同じく、要素間が対立するクラスターである。
4. 「転向」、「文学界」は図には表れないが＜亀井勝一郎＞を媒介にして意味的に成り立っている。
5. 以下、明瞭で強固なクラスター群がでてくる。

これらのことから、今後テキストを分析するに、括弧付き用語に注目することは、よい結果を出すと思われる。

付録B表：括弧付き用語の、頻度上位4件以上リスト

「日本浪漫派」	45	「古義」	7	「学校」	5
「コギト」	37	「文化人」	7	「古寺巡禮」	4
「近代」	20	「日本文学」	7	「神話」	4
「文学」	20	「文明開化」	6	「日本浪漫派廣告」	4
「転向」	11	「東洋の満月」	6	「道德」	4
「歴史」	10	「知識人」	6	「世紀」	4
「革命」	8	「文学界」	5	「論語」	4
「ぐろりあ・そさえて」	7	「進歩」	5		



付録B図：括弧付き用語の、クラスター分析（付録B表をもとに）